注記：本論考は個人の見解であり、日本国際問題研究所の見解を代表するものではありません。

水道整備過程から見た日本近代史

松本洋幸
（大正大学）

本報告では、近代水道という人々の生活に不可欠なインフラ整備のあり方を通史的に見ることで、中央―地方関係の形成・変容過程、都市空間の編成過程、さらには植民地・勢力圏を含めた技術移転のあり方など、様々な分野から近代日本の統治のあり方を捉え直すことができるという問題提起を行った。その際に、水道整備を牽引した主体や構想、各都市の資金調達や技術獲得のあり方に注目することで、中央・地方を俯瞰しながら時代の変化を動態的に把握するよう心掛けた。報告の大半は、拙著『近代水道の政治史―明治初期から戦後復興期まで―』（吉田書店、2020 年）をもとにした。

以下、いくつか報告中に明らかにした論点を挙げてみたい。

水道普及過程における国の関与は、先行研究では明治前期を除いてあまり多く語られることがなかったが、水道条例の制定・改正は地方の水道界の要望を踏まえたものであり、また水道布設費国庫補助金制度や、技術支援などを通じて地方の水道熱を政府が持続・安定化させようとしていたこと（ただし長期的にみれば成功したとは言い難い面もある）などを指摘した。また府県が中央政府との関係、横断的なネットワークなどを活用して、管下の都市の水道建設を財政・技術など様々な面でサポートしていたことも明らかにした。

しかし最も強調しておきたいのは、水道建設を手がける自治体の水道建設・維持にかける持続的なエネルギーである。地方は、決して政党や行政機構に「地方利益」を好餌に取り込まれる操作の対象ではなく、むしろ中央官僚・陸海軍・政党・府県・金融機関など、様々なルートや手段を巧みに使い分けながら、財源・技術の獲得に貪欲に取り組み、時には他の都市と競い合い、またある時には連携し合う。そうした水道建設にかける都市の持続的なエネルギーこそが、近代日本における水道普及、ひいては近代化の原動力となったと言えよう。

次に、近代水道の整備と都市空間の編成過程の問題に関しては、以下の二点が明らかになった。一点目は担い手の変化である。本報告では、20 世紀初頭の水道整備は地域振興を図る都市の名望家や実業家が主体となり、1920 年代以降に水需要の飛躍的拡大と多様化に伴い高度な専門知識と豊富な現場経験を有する水道技術者たちが中心となり、彼らが 1930 ～ 40 年代を通して自律性を強めていくことを指摘した。日本近現代都市史研究で指摘されている名望家的都市行政から官僚制的都市行政へという枠組みと合致する部分も多い。ただしそうした都市の技術者集団の蓄積は、技術者の（外地を含めた）都市間移動や上水協議会・水道協会といった関連団体を通じて形成されてきたことを強調しておきたい。

二点目は 1920 年代における都市の郊外開発に関する問題である。本稿が主な研究対象とした東京・川崎・横浜の郊外の町村では、市域編入を所与の前提としていたわけではなく、自前の水道建設を目標とし様々な運営形態を模索しながら、既存のコミュニティーを維持しようと苦悩していた。しかし急激な新住民の増加、水道経営の経済合理性・効率性・安定性を希求する声の高まり、さらには大都市主義から地方計画へという都市空間の大きな変化、などを背景として、最終的には大都市水道に包摂・一元化されていくのである。このように、大都市の外延化として描かれることの多い 1920 年代の都市の郊外開発について、郊外地域の多様な発展方向性があったことと、その限界性を指摘することができた。

このほか、20 世紀に入り日本がアジアで版図を拡げるなか、外地に渡った水道技術者たちは、内地より

も劣悪な水質や気象条件を克服するために急速濾過法や地下水源開発など先進的な技術の導入を試み、その成果は内地の水道整備に還元された。1930 年代に入ると、新たな活躍の舞台を求める内地の水道技術者や水道関連メーカーが大挙して海を渡り、満洲国建設や日中戦争下でのインフラ整備に当たるなど、日本水道界の海外進出傾向が強まる。第二次世界大戦終了後は、彼らの多くは帰国して戦時下で破壊された内地水道の再建を手がけ、さらには戦後補償の一環としてアジア諸国の水道建設に助力する存在ともなっていく。こうした技術者の移動を含めた問題は、今後の課題である。

21 世紀は水紛争の時代になると言われて久しいが、世界的に水需要が爆発的に高まり、欧米の民間水道会社がグローバルな水道事業を展開するなか、日本の高い水道技術の海外進出に注目が集まっている。一方、国内では、人口減少に伴う水需要の減少、老朽化した水道施設の更新など直面する課題を解決するため、2018 年 12 月に水道法が改正され、民間参入のコンセッション方式や、小規模水道の統廃合による水道の広域化などをめぐる議論が沸騰しつつある。こうしたなかで、近代日本の水道史はまたとないアナロジーを与えてくれるであろう。